

槃<sup>〇</sup>と言ふのである。涅槃は煩惱障を断じて生死を超越したる圓寂の境を指すものなれども、所知障を離れざる時は無住處の妙用を得ない、故に二乗の涅槃は之を大乘の涅槃に比すれば甚だ劣である、大乘中菩薩地に在りては二障全く除かざるが故に、之を佛果に比すれば、固より劣等である、佛果の涅槃は最勝圓明なるものにして眞善眞淨の究竟である。

次に大菩提とは菩提<sup>Boधि</sup>は新譯に覺と翻し、舊譯に道と翻す、無漏清淨の智品に名つくる。佛果の智品を分ちて四智心品と爲す、一に大圓鏡智相應心品、二に平等性智相應心品、三に妙觀察智相應心品、四に成所作智相應心品是なり。一に大圓鏡智相應心品とは、『論』に曰く此心品離諸分別所緣行相微細難知、不忘、不愚、一切境相、性相清淨、離諸雜染、純淨圓德、現種依持、能現能生、身土智影無間無斷窮未來際、如大圓鏡現象色像と。この心品は無漏第八識聚にして、有漏第八の行相所緣の微細なるが如く、能緣所緣の相微細にして知り難し、然れども一切境相に忘ならず、愚ならず、不愚とは迷闇ならざる義、不忘とは一切境恒に現前する義、即ち一切境常に此識の前に現じて之を緣するに迷闇ならざるをいふので、如來を一切種智、或は一切智と

大菩提

四智心品

平等性智

名くる所以である。此の心品は性相共に純淨圓滿である、純とは因位無漏の有漏と雜はれるに簡ひ、淨は一切有漏に簡ひ、圓滿とは二乘無學の功德の未だ満足せざるものに簡ふのである。而して無漏第八識は有漏第八識の如く、また現行種子の依持として、佛果の依正二報を現じて間斷あること無く未來際を窮むる。即ち本有上品無漏十八界の種子、佛果の初念に一時に現行し、依報を言へば衆寶莊嚴無際無邊の淨土、正報を言へば相好光明の色身、無礙難量の諸智心品、總て不可思議なる妙境界相を展開する。總て十八界の衆相現すること、大圓鏡に衆色像を現するが如くなるが故に、大圓鏡智と名くる。此心品は一切法を緣するが故に、眞如を緣する無分別智と、事相を緣する分別智との權實二智に亘る。二に平等性智相應心品とは、『論』に曰く此心品觀一切法自他有情悉皆平等、大慈悲等恒共相應、隨諸有情所樂、示現受用、身土影像差別、妙觀察智不共所依、無住涅槃之所建立、一味相續窮未來際と。此心品は因位の第七末那識を轉じたる心品にして、因中には我執を以て行相とし、自他差別す、果位は我執なきが故に、自他一切法皆平等なり、故に大慈悲を等起相應し、諸有情の機の宜しきに應じて、他受用の身土を示現する。因の第七か第六

妙觀察智

の不共所依たるが如く、また妙觀察智の不共所依となる。この平等の悲智は無住涅槃を證顯し、また無住涅槃を緣するによりて、此識恒に共に悲智と相應する。此智も事理を所緣とするが故に、權實二智に亘る。三に妙觀察智相應心品とは『論』に曰く此心品善觀諸法自相共相無礙而轉、攝觀、量、總持、定門、及所發生功德珍寶、於大衆會能現無邊作用差別皆得自在、雨大法雨、斷一切疑、令諸有情皆獲利樂と。此の心品は有漏の第六識と相應とを轉じたるもので、諸法の自相共相を觀察し、一切の法門に無礙にして、定慧功德を攝觀し、衆生の爲めに說法斷疑し、利益を得しむるの作用を爲す智品である。神用測り難きを妙と云ひ、具さに諸法の自共二相を觀するを觀察とし、名けて妙觀察智とする。權實二智に亘る。四に成所作智相應心品とは『論』に曰く此心品爲欲利樂諸有情故、普於十方示現種種變化三業成、本願力所應作事と。此の心品は有漏の前五識と相應とを轉じて得たる智品にして、諸有情を利樂せんが爲めに、種々の變化を示現して、本願ありて作すべきの事を作す、故に成所作智と名くる。事相の境を緣して化業を起すが故に權智の攝である。以上四智心品の中、平等性智妙觀察智の二は初地より分得す、見道現前の位に六七二識、二

無漏心品の王  
所數  
智品と名くる  
所以

執に違するが故に二智此に初起する。大圓鏡智成所作智は佛果の初念に之を得ず、第八識は因位の末刹那まで有漏心相續す、若し有漏の第八に非れば所熏とならず、金剛心の無間道即ち因位の最後心までは無漏を熏増して以て究竟無漏に至るのである。而して八識有漏なれば所變の五根また有漏である、故に五識も亦有漏である。斯く五八識は佛果の初念に頓に變更するものなるを以て、圓鏡成事の二智は唯佛果得となる。凡そ相應の心品には幾何の心王心所ありやと言ふに、無漏の心法は、八識心王と五遍行五別境と善の十一との二十一心所法に局るのである。以上四智心品、殊に智の名を立つる所以は智増勝なるが故である、相應の心所は前記の如く智のみではない、二十一の心所相應する、無漏純淨の心王心所の各心品である。この四智心品を概して大菩提とする。涅槃は無爲無漏なり、菩提は有爲無漏なり、無漏界は空寂にして色なく相なきものではない、善常至極の妙境界の身土を有する、色心依正は有爲生滅の種子所生法である、この種子は無窮に無漏第八の攝持する所で、佛果は究竟なるが故に、熏増なることなけれども、無漏清淨の法なるを以て、之を對治する作用の來り加はることは決して無い。故に佛果は未來際を

窮めて衰變なく、滅盡なし、佛自證の上には壽量を談すべきものならざれど、吾人の情謂に約して言へば無量壽である。

### 二 佛身佛土

佛身を判すること、諸論釋各解釋を設けて一準ならず、淨影の『大乘義章』などにも種々の佛身判を列ねてある、龜細の分別に名を立つれば種々の判目が出来る譯で、別に矛盾と言ふ次第でも無い。二身判にも法身生身と分ち、又は眞應二身と立て、三身判にも眞應化と分つもあり、眞報應と立るもあり、また法報化と判するもあり、四身判にも法報應化と分つもあり、應化佛功德佛智慧佛如佛と立て、眞身應身化身化身非佛と立つるなどもある、其の他種々になつてある。今この『成唯識論』は三身判を用ひてある、三身とは自性身受用身變化身の三である。

自性身

一に自性身とは、『論』に曰く自性身、謂諸如來眞淨法界、受用變化平等、所依雖相寂然、絕諸戲論、具無邊際眞常功德、是一切法平等實性、即此自性亦名法身、大功德法所依止故と。自性身は變化身受用身の所依たる平等實性の眞如を指す、凡ての相を離

受用身

れ、尋思の境を絶する、無相寂然の法界である、有爲無爲の功德之に依止するを以て、亦た法身と名くる。二に受用身とは、『論』に曰く此有二種、一自受用、謂諸如來三無數劫修集無量福慧資糧、所起無邊眞實功德、及極圓滿淨常遍色身相續湛然、盡未來際恒自受用廣大法樂。二他受用、謂諸如來由平等智示現微妙淨功德身、居純淨土爲住十地諸菩薩衆、現大神通轉正法輪、決衆疑、綱合彼受用大乘法樂、合此二種名受用身と。

自受用身

受用身に自受用他受用の二がある。自受用身とは佛の自境界にして三無數劫に無量の資糧を修集して起したる無邊の功德と、究竟圓滿にして極めて清淨なる、而かも常にして斷ることなく虚空に遍滿せる相好莊嚴の色身とをいふので、此の身は湛然相續して未來際を盡くす、即ち佛の自受用法樂の身である。これ即ち無漏第八の所變にして佛果の初念に現行する所である。他受用身は十地の菩薩を化

他受用身

益せんが爲めの示現の佛果である、自受用身は佛の自境界なれば因位の菩薩は之を知見することは出来ぬ、故に佛平等性智に由りて微妙の淨功德身を示現して入地の諸菩薩に對せらるゝ。而して大神通を現じ正法輪を轉じ、入地の菩薩をして大乘の法樂を受用せしめらるゝのである。されば他受用身は平等性智より示現

變化身

されたる佛身なれば、眞實の心々所法は無い。化現の心々所法が有る、凡て示現の身は心々所までが示現である、神力難思にして無量示現の身に、各化現の心々所を  
示現して、度生の事を作すのである。三に變化身とは『論』に曰く變化身謂諸如來  
由成事智變現無量隨類化身居淨穢土爲未登地諸菩薩衆二乘異生稱彼機宜現通說  
法令各獲得諸利樂事と、初地以前の菩薩凡夫二乗の爲めに現せらるゝ種々無量隨  
類の化身にして、その機の宜しきに稱ふて神通を現じ法を説かるゝので、その身形  
の如きも種々の相状を示現する。成所作智に由りて變化せられたるもので、他受  
用身と同じく實の心々所ある佛身では無い。以上を佛の三身とする。

法性土

自受用土

次に三身所居の土を判すれば、一に自性身の土はこれを法性土と名くる。この  
身土は法性の理に外ならぬで身土の體に差別は無い、義によりて分つのである、俱  
に非色の攝なれば形量の大小を説くべき限で無い。二に受用身の土は佛の自土  
である、此中自受用身は無漏第八識、三大阿僧祇に修する所の自利の無漏純淨佛土  
の因縁成熟しぬるに由りて、變爲したる周圍無際にして衆寶に莊嚴せられたる純  
淨佛土にして、受用身と共に盡未來際相續不斷の自境界の土である、無漏の色蘊を

他受用土

變化上

體性とする、此の土は因位の菩薩の窺ひ知る所で無い。他受用身の土は亦た自土  
に依る、即ち平等性智大慈悲力を以て、昔修する所の利他の無漏純淨佛土の因縁成  
熟せるに由りて、十地に住せる菩薩の機宜に隨て大小勝劣の淨土を變爲し、他受用  
身之に住せらるゝので、身土ともにその量は大小の定量はないが總で際限がある。  
無漏の色蘊を體とすることは前の如し。三に變化身は變化土に依る、これに淨土  
穢土の二種がある。これは成所作智大慈悲力を以て昔修する所の利他の無漏の  
淨穢佛土の因縁成熟せるに由りて、未だ初地に入らざる菩薩或は二乘凡夫の爲め  
に、その所應に隨つて淨穢大小の佛土を變爲し、變化身之に住せらるゝ、身土共に大  
小の定量はないが、勿論際限がある。

然るにこの他受用及變化に就て、佛が身土を變現して有情を利益し給ふといふ  
も、唯識の義理として、佛の所變を所化の有情が受用することは出来ぬ、要するに能  
化と所化との共變に過ぎ無い。佛が有情化益の爲めに身土を變現せられたるも  
のを増上縁として、所化の有情は自己識變の身土を現する、所化の有情は自己所變  
の佛身佛土を拜するので、佛所變の儘ではない。故に共變なりと雖も、その能變の

能化所化の共  
變

識の差別によりて佛の所變と所化有情の所變とは有漏無漏を殊にする。他受用にもあれ變化にもあれ佛の所變は唯無漏である、所化の有情の所變は有漏無漏に通ずる。地上の菩薩も五八識は有漏である六七二識は有漏無漏に亘る故に菩薩よりして言へば他受用土は有漏無漏に通ずる、地前の菩薩及凡夫の所變は皆有漏にして、二乗の所變は無漏に通ずる故に所化よりして言へば變化土も有漏無漏に通ずる。凡て佛土に往生するといふも、佛身を拜見するといふも、佛所變の利他の身土を増上縁として、自己の識變を同時同處に展開するに過ぎぬ、何處までも自心變の身土である。自心變の身土ではあるが、佛所變の利他の所現を増上縁とせねば、成り立たぬ故に、自心變の其の儘が佛攝化の悲用である。然るに能化の佛と所化の有情との關係には共不共がある、無始時來法爾として互に相繫屬する、故に多佛の所變が多有情の前に増上縁となりて同一の佛土と見らるゝこともあるべく、一佛の所變が多有情の前に増上縁となりて同一の佛土と見らるゝこともあるべく、種々の相望が成立する。是等が凡て他受用變化の所作である。

○

上來斷惑證理の徑路、修因得果の順序を叙し終る。修道の根機を言へば三乘の別がある、その二乗定性の有情は、二乘法によりて灰身滅智の無餘涅槃に到達し、以て流轉の籠中を免がるゝ、菩薩定性と不定種性の有情は、三大阿僧祇の長時に亘りて智徳を練磨し、無住處涅槃を證し、四智心品を得して、盡未來際廣大の法樂に住し、有情攝化の大用を示すに到る。涅槃を以て空寂虛無、總て萬象の止息したる、活動なく生命無き状態なりとするは、當時の外道學者間に思考せられたる涅槃論で、佛教内にも、二乗の無餘涅槃は全く一有情の斷絶に歸するものなれど、大乘の涅槃界は決して斯様なものではない。涅槃界なるものは煩惱惑業の繫縛を脱離したる、靈妙無礙活潑々地の大自在用を具足する大智慧光明の聖域にして、色心五蘊を具したる無漏の一有情相續である。その五蘊なるものは無漏種子の顯現にして、有漏界の如き生死相續を爲すものに非ず、盡虚空遍法界にして、而かも未來際を窮めて衰變なき永遠無限の大生命を把持する。この永遠無窮の大生命より、三身の妙用暫くも止むこと無く、所化の根機に應じて隨類應同、無方不測の利他化を成ずる。自からこの妙境界に到達し、他をしてまた同じくこの地位に到らしむる、二

利圓滿の不行、これ實に大乘涅槃界の活動である。

菩薩修行の期する所此の如き妙境界にして、全く二利の實現を旨とするものなるが故に、修行年時の三大無數劫に亘るが如きも、修行其の人に在りては必ずしも長からず、また速かに自己の解脱を成就せんことを期願せず、着々として二利行の過程を歩し、孜孜として斷惑證理の針路を進むのである。固より大心大行の人に非ずんば到底その後塵をも拜し得べきことではない。努め努めて止まず、進み進みて廢せず、如理の修行過つこと無くして、畢に二轉依の妙果に到達するのである。斷○惑○證○理○論○の○目○標○と○す○る○所○は○眞○に○遠○大○で○あ○る○眞○に○高○尚○で○あ○る○此○の○高○尚○に○し○て○遠○大○な○る○目○標○の○爲○め○に○佛○教○々○義○が○成○立○す○る○單○に○哲○理○と○し○學○說○と○し○て○研○究○す○る○は、佛敎として見るで無く、學問として弄ぶものなることを忘るべからず。

### 唯識要義終

## 唯識三十頌略釋

## 唯識三十頌略釋

### 唯識三十頌の成立及釋論

世親梵に婆藪槃豆 Vasubandhu といふ、無着梵に阿僧伽 Asanga)菩薩の肉弟にして佛滅九百年頃に北印度健駄羅 Gandhara 國に生れたる曠世の英俊である。初め小乗薩婆多部に於て出家し深く小乗教の蘊奥を探り、阿毘達磨俱舍論の如き有力の述作を爲すに至りしが、兄無着の教誠を受けて翻然として大乘に歸入し、専心努力大乘教の弘傳に盡瘁せられ、其著述の如きも大小乗合して一千部の多きに上つたと傳へらるゝ。其の法相教義に屬する著名なる述作としては攝大乘釋論唯識二十論、百法明門論、辨中邊論等の多數あり、而して唯識三十頌は、世親菩薩の最も晩年の作にして未だ長行釋を作るに及ばずして入寂せられたといふことである。此の三十頌は極めて簡短の字句に深要の意義を該攝したる有力の著作で、恐らくは世親菩薩も、一代討尋の精華を此に總持する覺悟なりしなるべく、隨て世親自身の長行釋を得なかつたことは

誠に千秋の恨事である。然るに印度教界に於ける世親菩薩の位置は非常に重要にして、世親の研究といふことが餘程盛に行はれたものと見ゆる。三十頌に就て註釋を著はした學者のみにも、二十八家の多きを出だすに至つたと傳へらるゝ。而して所謂十大論師なるものが其中での俊秀で、この十師の釋論が各十卷で合計一百卷を成した、この一百卷の釋論は玄奘三藏によりて釋傳せらるべく從事されたのであつたが、慈恩大師の請によりて、之れは中止され、護法菩薩を中心として僅かに十師異說の一端を摘録したる成唯識論十卷の編譯が出来た次第である。是れは末學をして紛雜なる異說に迷惑せざらしむるといふ考であつたのであるが、教義研究の上から見るときは、どうかの批評を免れないので、これまた世親の長行釋の出來て無かつたと同じく、後學の遺憾之に加ふるものはない。所謂十大論師とは、一に達磨波羅譯して護法と曰ふ、二に婁拏末底譯して德慧と曰ふ、三に悉耻羅末底譯して安惠と曰ふ、四に畔徒室利譯して親勝と曰ふ、五に難陀譯して歡喜と曰ふ、六に戊陀戰達羅譯して淨月と曰ふ、七に質咀羅婆拏譯して火辨と曰ふ、八に毘世沙密多羅譯して勝友と曰ふ、九に辰那弗多羅譯

して勝子と曰ふ、十に若那戰達羅譯して智月と曰ふ。此の十師に就て親勝火辨は世親と同時の人にして、德慧は安惠の師、安惠と護法とは同時の人にして、安惠が少しく先輩であつた、淨月は安惠と同時で、勝友勝子智月の三師は共に護法の門下で、難陀は勝軍の師と云へば少しく後の人と思はるゝ。今護法の出世を世親後一世紀半若くは二世紀と定むれば、この十師は殆んど冠蓋相接したる出世である。尙世親同代の無性論師、少し後れて陳那護月等。護法以後に戒賢勝軍等の名匠は何れも唯識教義史に忘るべからざる人である。

然るに玄奘渡天、その師事する所戒賢勝軍等の諸德にして、其の稟承する所護法の學解にありしを以て、成唯識論の翻譯一に護法を主とし、他師の說は、其の所破として擧示するに止まつた。此に於て支那法相宗は純然たる護法宗たる面目に於て開宗せられたのである。されば唯識三十頌の解釋を設くるに方りても、諸師の異說は斷片的に考證し得るに過ぎずして纏まつたことは知り難いので、ともかくも成唯識論の解釋に従ふ外は無く、またそれが法相教義として正統なのである。



## 唯識三十頌の始終と其の分科

唯識三十頌は何を説いたものか、抑また法相教義の面目は何であるかといふに、言ふ迄も無いが法相教義なるものは、他の佛教各宗の教義と同じく、哲理を以て法界の真理を討究し、その真理の眞面目に體達するを以て轉迷開悟の方法として、その實修實行の順序階次を立つるものである。法相教義の哲理的主張は我法二空である、二空所顯の眞性が即ち法界の眞面目である、一切有情は二空に反して二執に着し、爲めに流轉生死の果報に沒在する、二執を去りて二空に歸すれば、法界の眞性に體達して、涅槃菩提の妙境界を證得する。この義路を明すもの即ち唯識三十頌の始終にして、初めに我法は識變の諸法の上に假説したるもので實有に非らずと明し、次に三能變を分ちて有爲法の全部が唯識に外ならざることを明し、次に唯識といふに就て理論上の疑難聖教上の疑問を解釋して、三性三無性に及び、識變の依他は無爲圓成實の眞如に依ることを明し、後に此の二空の理を證する徑路として五位菩薩の行位を擧げ、究竟無漏界の相を明かして、以て一偈の結末と爲す。要するに法界の眞相は人法二空である、この眞相の通りに體會するには、これ／＼の修行を爲すべしと言ふが唯識三十頌の所明である。

三十頌の分科に就て唯識述記に三種の三科を立つ。一に相性位の三段、二に初中後の三段、三に境行果の三段に分つのである。初の相性位の三段に分つときは前の二十四頌は唯識の相を明かし、第二十五の一頌は唯識の性を明し、後の五頌は唯識の位を明かす。次の初中後の三段に分つときは初の一頌半を初分とし、次の二十三頌半を中分とし、後の五頌を後分とする。第三の境行果に分つときは前二十五頌は唯識の境、後の四頌は唯識の行、後の一頌は唯識の果を明かす。今は相性位の分科によりて章段を分つこととする。相とは依他起性、即ち有漏の諸八識である、前二十四頌は三能變に分ちて、以て一切諸法唯識に外ならず、我法の體性の認むべきもの無きを明すのである。次に性とは勝義諦圓成實性を明すので、依他の識相は眞如實性に依るものなることを示すのである。位とは唯識の行位にして、相性の所明の如く之を證得せんには修行の行位を要する、その位相を明すに五位の順次を立て、修入の徑路を顯はすのである。即ち唯識の相と性とは唯識觀の所對の境で、これによりて修行し、究竟して佛果に到

達する境行果の順序は此の如くして立つ。尙三段の分科を稍細分すれば左の如くなる。

偈頌大分爲三

- 一明唯識相二
- 一略辯唯識相……………由假說我法等一頌半
- 二廣辯唯識相三
- 一明能變相三
- 一異熟能變……………初阿賴耶識等二頌半
- 二思量能變……………次第二能變等三頌
- 三了境能變……………次第三能變等九頌
- 二正明唯識……………是諸識轉變等一頌
- 三釋通妨難二
- 一違理難二
- 一明心法生起……………由一切種識等一頌

二明有情相續……………由諸業習氣等一頌

二違教難二

一明三種自性……………由彼彼遍計等三頌

二明三種無性……………即依此三性等二頌

二明唯識性……………此諸法勝義等一頌

三明唯識位五

一明資糧位……………乃至未起識等一頌

二明加行位……………現前立少物等一頌

三明通達位……………若時於所緣等一頌

四明修習位……………無得不思議等一頌

五明究竟位……………此即無漏界等一頌

以上

(一) 一畧明唯識相

由假說我法 有種種相轉 彼依識所變 此能變唯三

謂、異熟思量、及了別境識

（大意） 此の一頌半の偈は略して唯識の相を明すのである、即ち依他法は皆識變の外はないといふのである。凡て我と云ひ法と云ふは假に由りて説を立てたもので實我實法なるものは無い、假我假法である。併しこの我法の上に種々の相狀を轉起する、世間では我に執して有情命者等の相を認め、佛教の上でも我によりて有學無學三乘十地等の區別を立つる、法に就ては外道學者には實德業等の名相を立て、佛教にても蘊處界等の法相を設けてある。然るに彼等は皆眼耳鼻舌身意末那阿賴耶諸識の所變に依りて現するもので、その所變の上に施設されたるものである。此の能變の識を分ちて唯三とする、異熟識能變と思量識能變と及び了別境識能變とである、異熟識とは第八阿賴耶識、思量識とは第七末那識、了別境識とは前六識を指す、是を初能變二能變三能變とする。この能變の相は次下に偈説されてある。（二空論及識變論參照）

（句解） 我とは常一主宰の謂である、常住不變にして有情の主宰者たる或者を認むる、我の學説には多様あれども要するに有情の本體に主宰の用を具ふる

我

法

無體隨情假

有體施設假

識

行相

所變

一法ありと執するを我執とす。法とは軌持を義とす、自性を任持して、軌として解智を起さしむる謂である、五蘊十二處等の法は實有なりと執するを法執とする。假とは我法の名の由りて立つ所以にして、これに兩様の義意がある。外道凡夫の所執たる我法なるものは、その實無體なるものにして、唯その妄情の緣する上に我法の相あるのみ、その相に名けて我法と言ふものなるが故に、之を無體隨情假といふ。聖教の上には我法と説けるは、依他の法體の上に、假りに我法の名稱を施設するものなれば、之を有體施設假といふ。斯く實我實法の認むべき無きに、我法の名を立つるが故に由假といふ。彼とは我法の相をいふ。識所變とは、識とは了別を義とす、了別は識の行相である、行相とは行解の相狀といふことにて、働く有様なり、今この能變の識を言ふには心所を攝した言葉である、心王心所は相應じて能變となる。所變とは『論』に曰く識體轉似二分と、自體分より見相二分を起すをいふ、見相二分は能緣所緣にして、共に心の作用である、四分説明參照、この依地の二分によりて我法を施設する、此の二分を離れて我法と名くべきものは無い、故に依識所變といふ。三能變の名は下に至りて解すべし。

(二) 二廣辯唯識相三、一明能變相中三、第一異熟能變  
 初阿賴耶識 異熟一切種 不可知執受 處了常與觸  
 作意受想思 相應唯捨受 是無覆無記 觸等亦如是  
 恒轉如暴流 阿羅漢位捨

(大意) この二頌半の偈は能變の第一阿賴耶識の相狀を明したもので、此中に十門の分別あり、十門とは一に自相、二に果相、三に因相、四に所緣、五に行相、六に相應、七に五受相應、八に三性分別、九に因果譬喩、十に伏斷位次である、阿賴耶識に關するこれだけの説明をこの偈句中に列擧してある。

偈文の意は、能變の最初に數ふべきものは第八阿賴耶識である(自相)。此識は有情總報の果體にして前生の善惡業を増上緣として引起されたる異熟果である(果相)。此の識には一切有爲法の親因緣たる種子を藏する、種子は此の識の體上の力用なれば攝用歸體して一切種識と名くる(因相)。此の識の能緣所緣の相は頗る微細にして知り難し、前六識の能所緣の知り易きに比すれば不可知と名

くべき程に分り兼ねる。所緣に種子と有根身と器界との三あり、種子有根身を執受と名け、器界を處といふ、即ち有情の身體及び外界の萬有は皆この第八阿賴耶識の所緣即ち相分にして、識の自體より變現せる心内の境に外ならぬ識變論参照其の如何なるものなるかは、前六識上の認識には、之を本質としたる相分を知り得るのみである(所緣)。能緣の見分を了と名く、所緣の微細なると共に能緣も亦不可知である(行相)。此の識は常に觸作意受想思の五遍行の心所と相應する相應。その中で受の相應は、五受の中唯捨受のみである、苦樂の如き轉變ある受とは相應せぬ(五受相應)。此の識の性は唯無覆無記のみにして善惡及び有覆無記には通せぬ。識が無覆無記なる如く相應の觸等の心所も亦た是の如く無覆無記である(三性分別)。此の識は無始時來恒に相續して轉起し、暫くも間斷あることなく、斷に非ず常に非ず、恰かも暴流の流れて止まざるが如くである(因果譬喩)。而して阿賴耶識の名は我執の現行によりて立てたるものなれば阿羅漢位に至りて全く我執の現行無きに至れば之を捨つる(賴耶三位の説明参照)我執無き位には異熟識の名を用ゐ、佛果に至れば執持識の名を用ゆる(伏斷位次)これ

を第八識の始終とする。

(句解) 阿頼耶。また阿羅耶。阿黎耶に作る。玄非は意譯して藏と翻す。藏に三義あり。能藏所藏執藏なり。能藏とは種子に望め、所藏とは能熏の七轉識に望め、執藏は第七識の我執に望むる。而して阿頼耶の名は第三の執藏の意を本とする。故に此の名を我愛永く現行せざる位に至りて捨つるのである。(第一章第一節三藏説明参照)。異熟とは有情總報の果體に名く、別報の果體は單に異熟生の名を用ゆる。異熟、異熟生を合して異熟果といふ。善惡業の増上縁に對して異熟といふ。(第一章第二節異熟習氣及異熟果説明参照)。一切種とは凡て有漏無漏に通じ、有爲法は必ず親因縁の種子より起る。故に一切とは有爲法の全部を指す。種とは現行法を生起する潜在勢力をいふ。此勢力は第八識の力用である。之に種々の區別あり。(第一章第二節因果論参照)。執受とは有根身と種子とを總稱す。『論』の二に曰く此二皆是識所執受攝爲自體同安危故と。執とは攝の義、持の義なり。攝とは攝して自體とする。持とは任持して壞せざらしむ。第八識が有根身と種子とを攝持するなり。受とは領の義、覺の義なり。領とは領受して己が境とする。覺とは

覺受を生せしむる。有根身はこの二義ともにあり。種子は覺受の義なければども領受の義あり。斯く有根身は攝の二義受の二義共に具し。種子は後の一義を缺けども共に識に執受せらるるといふを得る。されば執受は第八識の用にして、第八識は能執受なり。有根身と種子とは能執受たる第八を有するものなれば、是を有執受と名くべく、その有の一字を略して執受と名けたのである。處とは器界、有情身外の依報をいふ。各有情の第八識同じく各別の外界を變爲して之を受用する。受用せらるゝ義を以て器と名く。了とは了別、四分の中の見分にして、前の執受と處とを所縁として働く能縁の用である。不可知の三字は所縁と能縁とに通じてその知り難きをいふ。常與觸等の十字は相應の心所にして、第一章第一節六位心所の下に解するが如し。唯捨受とは受に憂喜苦樂捨の五受ある中、第八の相應は唯捨受のみなるをいふ。捨受とは憂にも喜にも苦にも樂にも非ざる何れにも偏せざる受である。第八は變化無き識にて微細に相續するが故に、憂喜苦樂の如き變化ある粗き受とは相應する能はず。是無覆無記とは無覆とは覆蔽する無きの謂にして、第七識の我執の如きは善惡といふ程の強き作用は無し

と雖も、無漏聖道を障へ自心を隠蔽するが故に有覆と名くる第八識は全く染汚に非ず善に非ざるもので覆蔽の義も無い故に無覆といふ、無記とは善惡の記別に相當せざる故に無記といふ。つまり無覆無記と言へば全然善惡に偏らざる性質である。而して第八識は無覆無記の中の異熟無記である。第八は有情總報の果體である、即ち異熟果なるもので異熟果は無覆無記に局る。第八識の無覆無記ならざるべからざる所以は、本編第一章第二節因果論種子の所熏所依を解する章段及び第一節阿頼耶識の説明に就て之を委くせらるべし。恒轉とは非斷非常を顯はす、無始時來念念に生滅して前後變異する、而かも常に間斷が無い、恒は非斷を表し、轉は非常を表はす、暴流とは喻顯で、流水の去り去りて常一にあらず、しかも次ぎ次ぎに來りて間斷なきに喩ふる。又暴流の風等の縁によりて波浪を起すも、流れて斷へざるが如く、第八識も衆縁に遇うて眼識等を起すと雖も、尙ほ第八は恒に相續する。又暴流の魚草等の物を漂はして流に隨て捨てざるが如く、第八識亦内の種子、外の觸等の法と恒に相隨て轉ずる、是等の譬意によりて如暴流といふ。阿羅漢位捨とは阿頼耶識の名を捨つる位をいふので阿

羅漢此に應と翻する、應とは契當の義。應斷煩惱と應受供と應不復受分段生との三義を具する、煩惱障を斷盡して、また分段生死を受くることなく、世間の妙供養を受くべき位を阿羅漢となす、三業無學の通名なり。然るに三乘の無學果位に於て阿頼耶の名無きは勿論として、瑜伽決擇分に不退の菩薩もまた阿頼耶識を成就せずとある爲めに之を解するに論の三に三師の説を擧げた第一師の説ではこれは二乗の無學果、即阿羅漢位の聖者が大乘に廻向し來つた人のことであるとなし。第二師の説では八地以上の菩薩を指すもので、八地に至れば未だ煩惱障の種子を斷盡しないが、純無漏相續にして、我愛の執藏永く現行せず、執藏無きが故に阿頼耶の名を捨つる、今の阿羅漢といふ名は八地以上を攝すると。第三師は初地以上の菩薩を指すもので、初地以上分別起の煩惱我見等無きが故に、阿頼耶と名けずといふ、この第三師の説は宜しくない、何となれば俱生起の我見あるが故に、若しこれまで攝すれば二乗の預流等の有學位まで攝せねばならぬと。捨とは識體を捨つることではない、第八識を捨つれば二乗の無餘涅槃の如く有情都滅する、阿頼耶の名が我愛の執藏によりて立つたものなる故に、三乘

の無學と不退の菩薩に至ればこの名を捨つるといふのである。

(三) 明能變相中第二思量能變

次第二能變	是識名末那	依彼轉緣彼	思量爲性相
四煩惱常俱	謂我癡我見	並我慢我愛	及餘觸等俱
有覆無記攝	隨所生所繫	阿羅漢滅定	出世道無有

(大意) この三頌の偈は第二能變を明かす、此中また十門を以て第七識を釋してある、一に出名、二に所依、三に所緣、四に出體、五に行相、六に染俱、七に相應、八に三性、九に界地、十に隱顯の分別である。

偈文の大意は、次の第二能變の識は之を末那識と名くる(出名)。此の識は彼の第八識の現行を所依として轉起し(所依) 而して彼の第八識の能緣見分を所緣とし、我法の相を思量する(所緣)。此の識の體性は思量を以て體性とす(出體)。此の識の行相もまた思量の外には無い(行相)。相應の心所は我癡我見我慢我愛の四煩惱染俱と及び餘の觸等の五遍行、別境の慧、八大隨惑とである、此の心所と

は常に俱である、此識は一類相續なる故に相應の心所を更むることは無い(相應) 而して三性分別には此の識の行相常に我法に就して自心を隱蔽し無漏聖道を障ゆる故に有覆無記に攝する、末那識の行相は微細なる故に、染汚なれども惡とはならぬ(三性)。界地は所生の趣生に隨て繫せらるゝ(界地)。此の識は無始時來第八識と共に間斷無く一類相續するも、無漏位に於て現行せぬことがある、即ち阿羅漢と滅盡定と出世道とには現行せぬ(隱顯)と明すが偈の始終である。

末那釋名

(句解)

末那譯して意といふ、思量の義である、思量は第七識のみに限らずと雖も、此識は恒審に思量する義ありて、特に思量を以て此識の名稱とする。恒とは無間斷の義にして、前六識には言はれない、前六識は總て間斷のある識である、審に思量すとは計度分別を用るとで、第八識の能緣に通じない、第八識は現量分別である、計度分別は第六識に通ずれども、恒起に非る故に、恒審思量といふときは第七識に限る、故に第七識を末那識と名くる。依彼轉緣、彼とは第八識現行を所依として起り、また第八識見分のみを所緣とするをいふ。識の生起には必ず俱有所依を要する、第八識は根本依として諸識の所依となるものなるが、殊に第

七識の所依所緣

七の不共所依となる。無始時來共に無間斷にして任運相續の識なるが故である。第七識の行相は第八見分を對象とし、その相續無間斷なるを誤認して、實我の執を把持するもので、平等性智の現行するまで暫くも止息せざる我執である、この我執は第六識の如く分別起に亘らずして、俱生任運記の微細なる行相である。我執といへば、その底に法執の存在することは勿論で、二執並び起ることは無いが、第六識の我空觀に在る場合には、尙ほ第七に法執は相續する。委しくは本編第一章第一節末那識の説明を参照すべし。思量爲性相（トモトモ）とは此識の體性も行相も共に思量といふ外は無、思量といふことが此識の體性でもあればまた行相でもある。四煩惱とは十煩惱中の四を取る、凡て我執に相應し、その所執の内我に就て慢を起し愛を記す等の俱起なる故に、我癡我見我慢我愛といふ。心所の釋名及び相應不相應の區別凡て本編の説明の如し。有覆無記とは此識には四惑相應する、染汚なることは言ふまでもなし、然れども、色無色界の惑が定に攝持せられて無記に止まるが如く、第七識は任運微細の故にまた無記に止まりて、無覆無記となる。隨所生所繫とは界繫分別で、所生の趣生、即ち第八本識の界繫に

## 七識の性相

七識の有覆無記

## 七識不現行の三位

隨て界繫を定むる、前六識には往々にして第八識と異りたる界繫を有するものがある、故に此に界繫を明したものである。阿羅漢等の二句は第七の現行せざる三位を擧げたもので、一に阿羅漢とは三乗の無學位を指す、二乗の無學は人執末那の現行種子を永斷し、大乘の無學は法執末那の現行種子まで永斷する、法執の側は二乗では染汚に攝しない、所知障はその所斷に非るが故に末那識に就ても斷捨の不同がある。二に滅定とは三乗有學の聖者の修する無漏の無心定である、是にも生空智果と法空智果との差別ありて、生空智果の滅定には第七人執の現行を伏し、法空智果の滅定には第七法執の現行までを伏する。三に出世道とは無漏智現前で、人空無漏の根本後得の位には人執の第七を伏し、法空無漏の根本後得の位には法執の第七までを伏する、以上の三位には末那識現行せずと明したのである。然るにこの三位に現行無しといふは染汚の末那に約したる説にして、轉依の平等性智相應の第七識に約すれば、斷伏に關しない。廣く思量能變の分位を言へば三あり、一に我執相應位、一切凡夫、二乗の有學、七地以前の菩薩の有漏心の位で、我執の現行しつゝある位である、二に法執相應位、一切凡夫、聲聞



緣覺と菩薩の法空智の起らざる位で、法執の現行しつゝある位である三に平等性智相應位、一切の佛果と菩薩の法空智現前の位である、分別して知るべし。

(四) 明能變相中第三了別境能變

次第三能變	差別有六種	了境爲性相	善不善俱非
此心所徧行	別境善煩惱	隨煩惱不定	皆三受相應
初徧行觸等	次別境謂欲	勝解念定慧	所緣事不同
善謂信慚愧	無貪等三根	勤安不放逸	行捨及不害
煩惱謂貪瞋	癡慢疑惡見	隨煩惱謂忿	恨覆惱嫉慳
誑詔與害憍	無慚及無愧	掉舉與昏沈	不信并懈怠
放逸及失念	散亂不正知	不定謂悔眠	尋伺二各二
依止根本識	五識隨緣現	或俱或不俱	如濤波依水
意識常現起	除生無想天	及無心二定	睡眠與悶絕

(大意) 此の九頌の偈は第三能變即前六識を明かす、これに九門の分別あり、一に能變の差別、二に自性、三に行相、四に三性、五に相應、六に受俱、七に所依、八に俱不俱、九に意識の起滅なり。

偈文の大意を述べれば、次に第三能變即ち了別境識の能變には六種の差別がある、眼識耳識鼻識舌識身識意識これなり(能變の差別)。此の六種の差別ありと雖も皆境を了別するを以て其の自性とし(自性)また行相とする(行相)六識は六境に分つて了別の用を作す外に作用は無い、自性とは自體分を指し、行相とは見分を指す。而してこの六識は善と不善と俱非即ち無記との三性に通ずる(三性)。相應の心所には遍行と別境と善と煩惱と隨煩惱と不定との六位ありて、その場合に應じて夫々の心行が俱起する、一時に全數が相應するのではない(相應)。六識皆苦樂捨の三受と相應する、六識は間斷轉易あるが故に或は歡行となり、或は感行となり、又は兩者に非ざる非二行となる故に三受と俱なるもので、七八二識の一類任運にして捨受とのみ相應するに同じからず(受俱)。初遍行觸等より尋伺二名に至る二十句は六位五十一心所の名を列ねて、その相を示す、前の相應

の細釋である。この六識の所依を言へば同じく根本の第八識に依止して起るもので(所依)常恒無間斷に起るものではない。前五識は多くの縁を要する故にその縁の具足するに隨て現起する。或は二識乃至五識の俱起することもあり、或は俱起せざることもある。濤波の水に依るに一浪起り二浪起り多少一定せざるが如く、縁の來り會するまゝに、五識の多少が現起する俱不俱。第六意識は、その生緣常に具足するが故に、何時でも現起する、併し之を妨ぐる違緣ありて來り會する時は、其の現行を中止する、無想天に生るゝと、無心の二定。即ち無想定滅盡定と極睡眠と極悶絶との五つは違緣として意識の現起を妨ぐる、これを五位無心と稱する、この外は意識常に現起しつゝあり意識起滅。以上九門を以て第三能變を説明するのである。

(句解) 第三能變とは六識を指す、六識の自體分より能緣所緣を變現す、能緣とは六識の見分で、所緣とは六識の相分色聲香味觸法の六境である。六境の中前五境は前五識が第八識所變の境を本質として、現量縁の相分を變じたるもので、三類境では性境に攝する、實の體用あるものである、色は色、香は香すべて現前

に體用あるが故に、心外の實有なるが如く見ゆるものなれども、すべて五識の變現に外ならぬのである。第六の法境は意識の相分にして、これには有法無法假法の種々あり、幻覺や錯覺も含まれてある、體用ある實境のみでは無い。要するに吾人が自覺しつゝある認識作用は、この第三能變の了別境の見相二分である、初能變二能變の認識作用は極めて微細にして、推理上これ有るを知るも、吾人は現在に之を自覺することは出来ない。本編第一章第三節識變論參照すべし。有六種とは六識を指す、六識の立名は所緣の境に由らずして、所依の根に由る、色識香識等と言はすして眼識耳識等といふのである、これは境を以て識に對するよりも、根を以て識に對する方が餘程親近であるからで、これに依と發と屬と助と如根との五義がある。第六識は所依の意根即ち第七識に依りて意識と名くる、然るに末那識もまた譯すれば意識と云ふが故に、六七同名となるも、七識は持業得名で、六識は依主得名意義に於て區別がある。遍行とは四一切を具し何れにも遍起する心所に名け。別境とは別々の境に就て起る心所に名け。善とは二世順益の心所に名け、煩惱とはまた根本煩惱と稱し、諸種の隨惑を等流する、煩

はこれ擾の義、惱はこれ亂の義、有情を擾亂する心所を煩惱と名く。隨煩惱とは煩惱等流の惑にして、之れに八大隨惑、二中隨惑、十小隨惑の區別あり。不定とは善と染汚等とに一定せず、遍行の如く總ての心に遍せず、別境の如く一切地にも遍せず、前の五位に攝すべからざる心所を不定と名くる。この心所の解釋はすべて本論第一章第一節六位心所の下に明なり。參照せらるべし。根本識とは第八識を指す、第八識の現行を以て諸識の共依とし、種子賴耶を以て諸識の親依とする、即ち諸識の親因縁である、すべて第八識を根本として諸識現起するものなれば根本依といふ。此の外五識隨縁の相狀、五位無心の解釋等凡て本編第一章に明なれば之を略す。

(五) 廣辯唯識相中、第二正明唯識

是諸識轉變、分別所分別、由此彼皆無、故一切唯識

(大意) この一頌の偈は上の三能變を受けて正しく唯識の理を結ぶのである。是諸識とは上の三能變の八識を指す、この諸八識の自體轉變して分別となり所分別となる、分別とは見分で所分別とは相分である、見分は八識の能縁の作

用で、相分はその所縁の用である。初能變の相分に種子五根器界あり、第二能變の相分に妄分別の我法の相あり、第三能變の相分に色等の六境あり。この識變に由りて見相二分あるのみにして、彼の我法なるものは皆存在ある無し、我法は假説のみにして實體なければ一切皆な唯識である。この唯識といふは不離識の唯識にして、心所法や眞如法までを無するには非ず、一切の有爲無爲假法實法皆な識を離れて存在せざるときは、別に我法の認むべきものは無い、これが唯識と稱する所以である。本編第一章第三節識變論五種唯識の説明に參照すべし。

(句解) 轉變とは相見二分を變似することである、『論』に曰く變謂識體轉似二分と、識の自體分より見相二分を轉變する、見相二分もまた依他法にして無法に非れども、之に依りて實の能取所取を執すべきに非ず、依他法は非有似有にして、計所執の二分に似たるが故に變似といふなり。轉變といふも自證分が變化して見相二分となるといふ、數論等の所謂轉變の意義と同視するときは大なる誤解で、尅實すれば唯依となりて起らるのである、自證分も依他法、見相二分も依他法、何れも共に因縁生の法である、自證分が見相二分を起らるので、四分分別

に約する時、自證分を體とし見相二分を用とする故に、識體轉似二分と言へるなり。安惠などの見相二分は遍計であるといふ見込によれば、また別解を要す。

(六) 釋違理難中第一心法生起緣由

由一切種識

如是如是變

以展轉力故

彼彼分別生

(大意) これより以下七頌は妨難を釋通する中、にまた二段あり、初に違理の難を釋し、次に違教の難を釋す、違理の難を釋する中また二あり、今の一頌は先づ心法生起の緣由を釋するのである。上來唯識を明したに就て、若し我法の實體なく、一切皆な唯識にして心外の境なくば、何者か所緣緣等となりて、能緣の分別を生ずるやとの疑がある、此の一頌はこの疑問に答へたのである。曰く心心所法の生起するには心外實有の對境あるを要しない。一切種識即ち第八識中に藏せらるゝ一切法の種子が種々に轉變して種種の現行を生ずる、また現行の八識心王及彼の相應の五十一心所の見相分等にも互に展轉して相助くる力を有するが故に、是等の種子及現行の力によりて、彼の心王心所の分別を生起するのである。この種子と現行との心心所法の生起に與ふる力を分てば四緣と爲

る、因緣等無間緣所緣緣増上緣である、この中因緣とは親因緣の種子等無間緣とは前滅の識聚、所緣緣との所緣の有法、増上緣とは他の衆緣、即ち所依の根等の如きを指すものにして、この四緣具足せざれば心心所法は現行せず、四緣具すれば現行する。而して此の四緣は種子と心心所法の現行の見相分等なれば、心外の境を待ちて起るのではない。

(七) 釋違理難中第二有情相續緣由

由諸業習氣

二取習氣俱

前異熟既盡

復生餘異熟

(大意) 違理の難を釋する中、此一頌は有情相續の緣由を明す。唯識にして外境あることなしといふに就て、疑あり、若し内識のみ有りと雖も外緣無くば、何に由りて有情の生死相續あらん、内の六根あり外の六境ありてこそ、境に於て貪瞋等起し業を結ぶべきに、外境なしとせば生死相續は出来なからうと。此頌は此の疑を釋かんが爲めに有情相續の緣由を明したのである。曰く、有情の生死相續は諸の業習氣と二取習氣と俱なるに由る、業習氣即ち業種子は有漏の善業及不善業の種子にして、これは生死相續の増上緣である、二取習氣即ち名言種

子は第八識等の種子にして生死相續の親因縁である。この親因縁と増上縁と俱なるとき次生を引くべき勢力充實し、前の異熟果既に盡くれば、復次に餘の異熟果を引生ずる。かくて順次に異熟を相續するが故に、有情は何時までも斷絶せぬ。これを有情相續の縁由とするのである。

(句解) 業習氣とは、業とは有漏の善不善の思及びその眷屬に名くる、法相教義にては三業皆思を以て體とする、この現行の思は刹那に滅じ去りて異熟果を招くべき力用無きも、その所熏の種子は相續して、所應の名言異熟無記の種子を資助し、異熟果の現行を引生せしむる。二取習氣とは二取とは能取所取にして見相二分を二取と名け、見分熏相分熏によりて成したる種子を二取習氣といふ、即ち名言種子、一切法親因縁の種子なり、業種子に助けられて次生の異熟を引く名言種子は第八識及前六識の異熟果を生ずる親因縁の種子である。この増上縁の業習氣には、その資助の勢力に期限あるを以て、若干の期限を以て異熟果は盡くる、而して他の業習氣に資助せられたる、他の異熟果之に代りて現行するのである。この種子の關係及び生死相續の相狀は本編第二章流轉相續論に就て

知るべし。

(八) 釋違教難中第一三種自性

由彼彼遍計	遍計種種物	此遍計所執	自性無所有
依他起自性	分別緣所生	圓成實於彼	常遠離前性
故此與依他	非異非不異	如無常等性	非不見此彼

(大意) 妨難を釋通する中、二に違教の失を通ず、此中又二、一に三種自性を明す、唯識に就て又疑あり、若唯識のみならば、何故に經中處處に三性ありと説ける、寧ろ一性に於て然るべしと、今三種自性も亦た識を離れずして存在することを明して疑難を釋する。此の三頌の中第一頌は遍計所執性、次の半頌は依地起性、次の半頌は圓成實性、後の一頌は依他圓成の關係を明してある。始に遍計所執を明す、偈意は六七二識の能遍計識に由りて、種種の依他起性の物を遍計し、而して實我實法と執したる、此の遍計所執は、妄情計度の上にもみ存するものにして、其の自性は全く所有あること無しといふのである。次に依他起性を明す、偈意は

依他起性は他の衆縁に依りて生せらるるといふので、分別縁とは諸の有漏一切の法を分別と名くる、分別を依他の體として見ると、能生の縁として見るとの二釋あり、又染分の依他に局らず、廣く染淨の依他を攝し、染淨の心心所法に通じて分別と名くるとの釋あり、隨宜に釋して可なり、要するに依他起性は縁によりて生せられたるものにして、自然性あるものに非ず、と明かす文意である。次に圓成實性を明かす偈意は、圓成實性は、他に求むべきで無く、彼の依他法の上に常に遍計所執の實我實法を遠離したる、二空門に顯はさるる理性であるといふのである。即ち圓成實性は二空所顯の眞如にして、依他法の實性である。次に依他圓成の關係を明す頌意は、此の圓成と依他とは、事理相性の關係なれば、非異非不異である、恰かも無常無我等の性を諸法の上に見るが如し、無常無我等は諸法の共相である、故に非異非不異である、事理の關係亦此の如きものなるを以て、此の圓成實性を證見せざれば、彼の依他起性の如幻を了したるものといふべからずといふのである。以上三種自性は、依他法は五法中の事の四法を該攝し、圓成實は理にして無爲なり、然るに五法皆これ識を離れず、遍計所執は當情現相にして

また識を離れず。故に三性即是れ唯識にして、三性の説は唯識を成するも、唯識の疑難となるものに非らず。

遍計所執釋名

〔句解〕 彼。彼。遍。計。とは能遍計識、即ち六七二識を指す、種。種。物。とは所遍計の境にして能遍計識の所縁縁と爲る、すべての依他法を指す、圓成實性は直ちに所遍計と爲るものには非ず。遍。計。とは周遍計度の義にして、廣く諸法を縁じて我法の執を起すが故に遍計といふ、第七識は廣縁の識に非る故に遍と名け難し、雖も、遍計の類なるを以て共に遍計と名くる。この能遍計の六七二識が依他法を所縁として我法の行相を爲す、第二句の遍。計。とは能遍計心上の行相を指す。第三句の遍。計。所。執。性。とは實我實法の當情現相にして、六七二識が依他法を妄計したる所執である。これは依他法の上に存する實義に非ずして、妄計の上のみ存するが故に當情現相といふ。これを無所有といふのである。依。他。起。とは他の衆縁に依りて生起すとの謂で、無自然性を顯した名稱である、有爲の事相は悉く依他起性といふ、心法は四縁所生、色法は二縁所生にして、事實幾多の因縁を待つて生じたるものならざるは無い。圓。成。實。とは眞如の理性、圓滿し、成就し、諸法

依他起性

圓成實性

の實性たるをいふ圓滿とは體の遍くして處として無きこと無きを顯はし、成就とは體常にして生滅に非るを顯はし、實性とは體虛謬に非ざることを顯はす、即ち二空の智によりて證せらるゝ諸法の眞性である。本編三性三無性の題下參照すべし。

(九) 釋違教難中第一二三種無性

即依此三性、立彼三無性、故佛密意說、一切法無性、  
初即相無性、次無自然性、後由遠離前、所執我法性

(大意) 違教の難を釋する中第二に三種無性を明かす。疑あり曰く、若し三性ありて皆識を離れずとならば、經の中に何故に一切法皆無自性と説けるやと、此の疑に答へん爲め三性三無性の關係を述べたるなり。即ち此の遍計依他圓成の三性に依りて、彼の相性勝義の三無性を立つる故に佛は密意を以て經に一切法は無性なりと説かれたのである。密意といふは般若等の空教は未だ佛意を十分に開顯せざる隱密の説である、三性に依りて三無性を説くといふも、三性の説が前で三無性説が後といふ意には非ず、三無性と般若等に説けるは三性の

上の無性の義に依りて説きたるものなりとの意である。初に遍計所執の實我實法の相狀は體相都無なるが故に即ち相無性と説き、次に依他起性は衆縁に托して生じたるものなれば、幻事等の如く假有の法なり、その性全く無なるものには非れども、因縁生なるが故に無自然性即生無性と説き、後に圓成實性は前の所執の我法を遠離したる二空門に由りて顯るゝ、依他法の實性なれば、勝義無性を立つる。されば相無性は體無なり、生無性勝義無性は其の體無なるに非ず、妄執の我法を遠離したるを無性とする。斯く三無性は三性の上に立てた法相で、三性の諸法を撥無したるものではないと明したのである。

(句解) 密意説とは未了義經を指す、顯了ならざるを言ふ、般若等に空教を説くは未了義なり、解深密經に三性を説きて、前の無性の説に對し中道を説くは了義經である、是を顯了といふ。相無性の相は體相の義にして體相都無を云ひ、生無性の生は因縁生を顯はし、この因縁生法に自然性無きを無性と云ふ、因縁生まを空無なりとするではない。勝義無性とは勝義とは眞如は諸法の實性たる眞勝義諦なる故に勝義と名け、この勝義の法性には相の執るべき無きを以て無

性といふ何等執るべきの相無きを我法を遠離すといふ。

(十) 二明唯識性

此諸法勝義 亦即是眞如 常如眞性故 卽唯識實性

(大意) 此一頌は相性位三科の中、第二に唯識の性を明すので、上の三性三無性の偈に連絡して、此の圓成實性は一切諸法の眞勝義諦である、勝義諦も重重に立つものなるが、これは第四の勝義勝義にして亦卽ち是れ眞如である、常住一如の法にして諸法の體性なるが故に、卽ち是れ唯識の實性である。唯識の實性なるが故にまた識を離れず、卽ち唯識である。斯く唯識の實性を明すを以て偈の意とする。

(句解) 勝義諦に四重あり、一には世間勝義、蘊處界の三科なり、二に道理勝義、四諦の因果なり、三に證得勝義、詮門二空の眞如なり、四に勝義勝義、廢詮一實の眞如法界にして諸法の眞性なり、圓成實性は第四の勝義勝義を指すのである。眞如とは眞實如常、眞實は有漏法を簡ぶ、有漏は虚妄なるものなり、如常は無漏有爲を簡ぶ、無漏有爲は眞實なれども生滅ありて常に非ず、湛然として虚妄ならず、諸

法の眞性たるが故に眞如といふ。唯識實性とは唯識性に二種あり、一には虚妄唯識性、これは遍計所執である、二には眞實唯識性、これ卽ち圓成實性である、今虚妄を簡んで實性といふ。又二種の唯識性あり、一には世俗唯識性、依他起性卽ち世俗諦の法である、二には勝義唯識性、勝義諦にして圓成實性を指す、今世俗を簡んで實性といふのである。

(十一) 三明唯識位中、第一資糧位

乃至未起識 求住唯識性 於一取隨眠 猶未能伏滅

(大意) 以下唯識の行位を明かす、中に五位あり、此頌は第一に資糧位を明かす。資糧位また順解脱分と名くる、十住十行十廻向の三十心初阿僧祇劫の間、成佛の資糧を積集する。此位にありては未だ唯識觀を起して唯識性に住せんと求めず、之を求むるは次の加行位順決擇分卽ち十廻向の滿心、將に初地に入らんとする四善根の位である。資糧位にてはこの事無きを以て、二取隨眠卽ち二障の種子に於て猶未だ伏滅する能はざる位である、勿論此位は有漏行である。

(句解) 二取隨眠とは二取とは能取所取を執するをいふ、この二取の現行に



よりに熏じたる種子を二取隨眠といふ、二障の種子を隨眠と名くる所以は、有情に隨逐するを隨と言ひ、第八識中に眠伏するを眠と言ふなり。伏斷とは種子を押へて現行を生せしめざるを伏と言ひ、種子を除くを斷といふ、資糧位中にありては伏斷ともに無きなり。

(十二) 明唯識位中第二通達位

現前立少物 謂是唯識性 以有所得故 非實住唯識

(大意) 第二に加行位を明かす、これ第十廻向の滿心に見道に入らんが爲めに、先づ有漏智を以て能取所取空を觀す、見道に接近したる加行なるを以て、殊に加行位と名け、また順決擇分といふ。此の加行位に煥頂忍世第一法の四位を経て二取空を印忍すと雖も、尙未だ眞如の實體に契はず、現前に眞如の相分を立て、是を觀して是れ唯識性なりとする、偈に少物と言ふはこの相分を指す、少しの物を挾むとの意である。されば此相分は眞如の如く無相ならず、所得有るを以ての故に實に唯識性に住したるに非ず。次の眞見道に入れば無漏無分別智眞如に遍附し、無所得の觀に住する、此に至れば理智全く冥合して能取なく所取なく、

眞に唯識性に住すと言へる、加行位では二取空を印忍すれども尙ほ相分を立て、有所得である。併し此位には唯識性に住せんと求むるが故に二取隨眠の現行を始めて伏する、前位とは一段の進歩である。

(十三) 明唯識位中第三通達位

若時於所緣 智都無所得 爾時住唯識 離二取相故

(大意) 第三に通達位を明かす、此位は初地の入心にして、始めて眞如を證見するを以て見道と名くる。四加行位に於て能取所取空を印忍し、その世第一法の次刹那、忽然として無漏智現前する、此に於て所緣の眞如に於て一切の相分を取らず、之を挾帶して都て所得無きに至る、之を根本無分別智と名くる、一心眞見道位なり。若時とは無漏智の緣如にも、後得智に在りては相分を立て、有所得の觀あり、相見道の如き即これなり、今是に簡んで眞見道根本智緣如を取るが故に若時といふ、爾の根本智無所得の時に唯識性に住するのである、住するとは能觀の智が所觀の理に冥合せるをいふ、如何に理智が冥合せるかと云ふに、平等平等にして二取の相を離れたるが故なり、二取の相とは能取所取の相なり、之を

離れたるの智はこれ理性に住するものである。一心眞見道十六心相見道安立諦非安立諦等の義本編に叙するが如し。

(十四) 明唯識位中第四修習位

無得不思議

是出世間智

捨二麁重故

便證得轉依

(大意) 第四に修習位を明かす、初地の住心より第十地の滿心に至るまで二阿僧祇劫に亘る無分別智修習の行位なり、又これを修道と名くる。無得不思議とは根本無分別智を云ふ、所取を遠離するを無得と名け、能取を遠離するを不思議と名く、又曰く分別戲論の相を離るゝを無得と云ひ、妙用測り難きを不思議と名くと、無分別智の相である。出世間智とはこの無分別智を言ふ、世間を斷するが故に出世間と名くる。此の無分別智を十地の中に於て數々修習するときは、終に煩惱障所知障の二障の麁重を捨つる、麁重とは二障種子の名なり。斯く無分別智を以て數々修習し、二障の種子を斷捨し盡すときは、便ち轉依を證得するに至る、轉依とは究竟に至れば即ち佛果である、修道の極位は即ち佛果に到達するのである。二障の伏斷の次序等は本編に略叙するが如し。

(句解)

轉依とは。依とは依他起性なり、染淨法のために所依と爲るが故に依と名く、染とは虚妄の遍計所執にして、淨とは眞實の圓成實性である。轉とは依他起の上の遍計所執を轉捨して、依他起の中の圓成實性を轉得するをいふ、煩惱を轉ずるに由りて大涅槃を得、所知障を轉じて大菩提を證する、これを二轉依の妙果とする。又曰く依とは即ち是れ唯識眞如をいふ、生死涅槃の所依なるが故に依といふ。生死を轉滅し、涅槃を轉證するを轉依と曰ふ。

(十五) 明唯識位中第五究竟位

此即無漏界

不思議善常

安樂解脫身

大牟尼名法

(大意) 第五に究竟位を明す、究竟位とは佛果なり、無學道と爲す。此とは前頌の轉依を指す、これ即ち究竟の無漏界である、究竟位に至れば諸漏永く盡きて、性淨圓明である、二乗の無學の如き所知障と俱なるが故に性淨に非ず、一切有學位の無漏は圓明に非ず、是等に簡んで無漏界と稱する。四智心品十八界皆究竟無漏界である。此の轉依の果は尋思言議の道を超過せる故に不思議といふ。善とは白法にして純善なるをいふ、是に四義あり、一には清淨法界は生滅を遠離

して極めて安穩なるが故に、二には四智心品妙用無方なるが故に、三には有爲無爲皆順益の相あるが故に、四には不善法と相違せるが故に、無漏界を説いて善と爲すのである。有漏善とは其の意義を異にする。常とは轉依の果盡期無きをいふ。清淨法界は無生無滅にして性變易なきが故に常なり。四智心品は所依の眞如常なるが故に斷盡する無し、亦これ常なり。安樂とは逼惱無きをいふ。清淨法界は衆相寂靜なるが故に安樂と名け、四智心品は永く惱害を離れたるが故に安樂と名く。加之能く一切有情を安樂ならしむるを以て轉依の果を安樂といふ。解脱身とは生死を超過し縛障を遠離するをいふ。二乗の果も永く煩惱障を遠離するが故に但に解脱身とは名けらるゝが、次の大牟尼とは名けられぬ。大牟尼とは佛世尊は無上寂默の法を成就する故に、大牟尼と名くる。寂默の法とは離言法性なり。牟尼此に寂默と譯す。この牟尼世尊の二轉依の果は永く二障を離れ、無量無邊の力と無畏等の大功德法に莊嚴せらるゝが故に、法身と名くる。前の解脱身を大牟尼に在りては法身と名くる。二乗の解脱身には此の如き無量無邊の徳相を具せず。所知障を離れざれば無邊の功德を具しない。煩惱を離れて解脱身と

名け、所知を離れて法身と名くるのである。一頌略して佛果の徳相を擧示する。四智三身等の義『論』には廣く釋してある。就て知るべし。

以上三十頌を略釋し畢る。固より略中の略である。之を委くすれば『成唯識論』の始終に亘る。本編には聊かその要義を摘録し置きたり。讀者參照せられなば多少の便宜ならんか。

## 唯識三十頌略釋終

名目索引 (五十音別)

(略または十項略釋を指す)

アの部

阿摩羅識	二五	愛	三三	異熟因果	三三
阿黎耶識	一八	悪見の五種	一三	異熟無記	一七六
阿陀那識	一七	安立語の真如	三七二	異生性	一六〇
阿頼耶識	八三	イの部		威儀路心無記	一七六
阿頼耶存在の説明	九七	意識	七三	因縁	二二
阿頼耶の行相所縁	九四	意識の俱有所依	二二	因縁變	一四
阿頼耶の相應	一三四	意識の五位無心	一〇五	因果同時	二〇四
阿頼耶の三位三名	八八	意識の生縁	一五	因果異時	二〇四
阿頼耶の三相	八四	意識の分別	七三	因相	二〇
阿頼耶の三藏	八四	意成身	三九	引發因	二二八
阿羅漢の三義	略、一五	異熟	二三四	印度大乘の二宗	四
		異熟生	二三四	一因論	一九四

一理隨緣說	七	緣起論	二	我執習氣	二九
一心真見道	三六九	起信と世親との緣起說	五	戒禁取見	二五
<b>ウの部</b>		十地論の緣起說	一三	<b>キの部</b>	
有	三三二	唯識論の緣起說	一五	器界	九六
有爲無爲永別論	二八五	圓成實性	二八三	形色	一五一
有支習氣	二一九	緣覺種性	二五二	境界依處	二二七
有體施設假	略、九	<b>オの部</b>		行	三三一
有潤種子依處	二二七	隱劣顯勝識	二五七	<b>クの部</b>	
有法	一四三	<b>カの部</b>		苦	三二七
有覆無記	一七七	我	三〇四	空有	二九五
有漏無漏	一八四	我執	三〇三、三三七	俱起の煩惱	一二七
有漏の根本	一八七	我見	一三三	俱生起	三三六
<b>エの部</b>		我空	三〇四	工巧處心無記	一七九
依他起性	二八三	我愛執藏現行位	八六	究竟位	三六一

果相	八九	索引因	二二七	五見	一三二
共相不共相	二四六	遺虛存實識	二五六	五境	一四六
觀待因	二二六	道相證性識	二五七	五境は五識の相分なり	一四六
<b>ケの部</b>		見取見	一三五	五果	二二二
假法	一四四	眼識	七二	五俱意識	七五
加行位	三六七	眼識生緣	一〇四	五根	一四四
計度分別	二七〇	現量	二六七	五種唯識	二四〇
決定藏論と瑜伽論	二六	現行	一九六	五重唯識	二五六
顯色	一五〇	現行熏種子	二〇四	五性各別說	三五一
顯境名言	二二八	現行對現行の因果關係	二二七	五性各別の立量	三五七
見分	二六二	現行熏種子の因果關係	二二八	五識	七一
見分熏	二〇九	<b>コの部</b>		五識影像の對象	一四九
見道初無漏	三六九	五位	六九	五識の俱有所依	一〇一
見道斷惑	三七〇	五蘊	一六九	五識の分別	七二

五識の相應	一三五	言詮中道	二九六	三通情本	二七五
語依處	二二六	サの部		二類境南北兩傳	二七六
業	三二、三三六	作用依處	二三八	三種自性	二七九
故思不故思	三三三	差別功能依處	三三九	三種無性	二九一
業種子	二二九	薩伽耶見	一三三	三世兩重の因縁	三三五
虚空無爲	一六五	三無性論と顯揚論	二二	三心相見道	三三三
香境	一五二	三時教判	五六	シの部	
極迥色	一五五	三科施設の理由	一七三	思	一一四
極微	一五四	三性分別	一七三	四縁	二二二
大乘極微	一五四	三量	二六七	四縁と十四十五依處	二五二
小乘極微	一六	三分別	二六九	四縁五果の關涉	二三六
極略色	一五四	三類境	二七〇	四縁の具不	二二六
根	一四四	三隨心	二七四	四加行位	三六七
根依處	二二七	三不隨心	二七二	四無礙解	三七八

四種涅槃	三六五	土用依處	二三八	種子の六義	二四
四智心品	三六六	土用果	二五	剎那滅	二四
四分	二五八	識	三三	果俱有	二五
資糧位	三六三	色	一五〇	恒隨轉	二五
支那法相宗成立	三九	識變無爲	一六八	性決定	二六
時	一六三	色法	一三六	待衆縁	二六
自相	八四	色法と業道	一四二	引自果	二六
自相共相	七五	色法唯識説明	二四三	種子の三名	二七
自在所生色	一五八	種子	一九六、一九八	取	三三
自證分	二六二	種子生現行	一九六	執藏	八七
自性分別	二六九	種子生現行の因果	二〇二	修道	三七四
自性身	三九〇	種子生種子	二〇三	修習位	三七四
自然論	一八九	種子熏習の例	二〇	修道斷惑	三七四
持種の資格	二二二	新熏本有	一九七、二〇〇	習氣依處	二二七

受	二二、三二	十二處	一七〇	所熏の四義	二二
受所引色	一五五	十二因縁	三六	堅往性	二二
受用身	三九一	十六心相見道	三七三	無記生	二二
受用土	三九二	十八界	一七一	可熏性	二二
邪見	一三四	宿作論	一九二	和合性	二二
十信	三六四	順現順後業	三四	聲境	一四八
十住	三六三	順解脱分	三六三	聲境等の心外無法	一四八
十行	三六四	順決擇分	三六七	聲聞種性	三五二
十回向	三六五	諸識の所依生縁	二〇一	性境	二七一
十地	三六七	諸識の俱起	一〇七	生	三三三
十婆羅密	三七九	所藏	八六	生無性	二九三
十重障	三七六	所縁縁	三三	生起因	二二七
十眞如	三七六	所知障	三九	障礙依處	二二九
十因十五依處	二二六	所量能量量果	二六三	勝義無性	二九三

勝義世俗	三三	心所法	一〇八	新舊合生説	二〇〇
勝義勝義	三四	心王心所行相の差別	二〇	新舊兩譯の十四相違	三八
證自證分	二六三	心所法の性業二用	二二	親因縁	二二
證得世俗	三三	心心所相應	一三三	親所縁縁	二二
證得勝義	三四	心外實有の批判	一三七	身識の生縁	一〇五
小乘極微説の批判	一三八	心心所法の三性分別	一八三	スの部	
小乘因縁説と法空	三〇八	心法唯識	二四二	數	一六三
淨影の七八識論	一六	心所法唯識	二四三	隨説因	二二六
清辨護法の空有	三〇八	眞如無爲	一六七	隨順依處	二二八
成所作智	三八八	眞異熟	二三四	隨念分別	二六九
成唯識論の編譯	三三	眞見道	三七〇	隨煩惱の三種	一三一
捨濫留純識	二五六	眞實具依處	三六	隨煩惱の二十	一三八
信	二二七	眞俗二諦	三〇	セの部	
心法	七二	新熏本有説	一九八	世間世俗	三二二

世間勝義	三三三	リの部	相應の四義	一〇九	觸境	一五三
世親教義の支那三傳	二二	相應の四義	大圓鏡智	三七二	夕の部	三六六
菩提留支所傳	一一	相見道	體空執空傳	八	體空執空傳	二九四
眞諦所傳	一九	相續執持位	帶質境	二五八	帶質境	二七五
玄奘所傳	三三	相分	相分重	二〇八	チの部	二八二
世親沒後緣起論の討究	一〇	相違因	相違因	二二九	地論攝論の阿頼耶識	八二
攝大乘釋論の如來藏說	三二	相無性	相無性	二九二	擇滅無爲	一六六
攝授因	二三八	想受滅無爲	想受滅無爲	一六七	定異因	二二九
攝末歸本識	二五七	總報別報	總報別報	二二三	定中の意識	七六
舌識の生緣	一〇五	増上緣	増上緣	二三四	定不定業	三三四
善	一七四	増上果	増上果	二三五	通達位	三六九
善の心所	一七	増不増業	増不増業	三三三	テの部	
善不善等の業	三三五	觸	觸	一一一、三三		
善惡業果位	八八					

轉依	三六二	ニの部	涅槃那	三六四
轉生相續の意義	三二七	二執二障	ノの部	
轉變の意義	略、三五	二種生死	能熏の相狀	二〇八
トの部		二重中道	能生因	二二二
得	一五九	二取空	能熏の四義	二〇八
等流果	三三四	二取習氣	有生滅	二〇八
等無間緣	三三二	二取隨眠	有勝用	二〇七
同事因	三二九	二轉依	有増減	二〇七
當情現相	二七九	二世一重の因緣	和合轉	二〇七
道理世俗	三三三	日本法相宗の傳來	能藏	八五
道理勝義	三三三	耳識の生緣	能變の新舊異說	二五
獨影境	二七三	人法二空	ハの部	
獨頭意識	七五	潤生の惑	方便因	二二三
獨散意識	七五	ネの部	八識の三性分別	一八〇



判教の必要  
判教の種類

四七  
不定種性  
不相應行

三五二  
遍計所起色  
遍計所執性

一五七  
二七九

ヒの部

不相應法の唯識

二五五  
邊執見

一三四

比量

二六八  
不動無爲

一六七  
變易生死

三四七

非量

二六九  
不善

一七四  
變化身

三九二

非擇滅無爲

一六七  
不障礙依處

二三〇  
變化土

三九三

非安立諦

三七三  
不相違因

二三〇  
變化心無記

一七九

毗播迦

八八  
分段生死

三四六  
ホの部

六八

鼻識の生縁

一〇五  
分別變

一四四  
法

六八

表色

一五二  
分別起

三三八  
法執

三〇六

表義名言

二二八  
へ部の  
別境の心所

三三八  
法空

三〇六

平等性智

三六七  
別境の心所

二二五  
法性土

三九二

フの部

遍行の心所

二二  
法性の無爲

一六八

不定の心所

一三二  
遍行の四一切

二二  
法處所攝色

一五四

法相宗に對する他家の判擇 六二

末那識存在の説明

七九、一三四

無想定

一六〇

菩薩種性

三五一  
末那識の俱有所依

一〇三  
無想果

一六一

菩薩の行位

三六二  
末那識の生縁

一〇五  
無間滅依處

二二七

菩提

三六六  
末那識不現行の三位

略、九

無爲法の唯識

二五五

煩惱の心所

一三〇  
ミの部

無明の十一殊勝

三二九

煩惱障

三三九  
味境

一五二  
無漏心品の心所數

三八九

煩惱所知二障の區別

三三九  
名言種子

二二八  
無性有情

三五二

本有新熏

一九七  
妙觀察智

三三八  
無體隨情假

略、九

發業惑

三三九  
ムの部

夢中意識

七六

マの部

無法

一四三  
無覆無記

一七八

末那識の名義

七六  
無記

一七  
メの部

一七八

末那識の分別

七六  
無爲

一六四  
名色

三三一

末那識の我執

七七  
無漏

一八四  
減盡定

一六一

末那識の相應

七九  
無明

三三〇  
ユの部

三三〇

唯本有説	一九六	六處	三三
唯新靈説	一九九	六經十一論	四二
唯識の九問答	二五〇	ワの部	
唯識三十頌の成立及釋論	略、一	和合依處	二二九
唯識三十頌の分科	略、四	惑	三二九
唯心説と由心説	九		
ラの部			
老死支	三三三		
リの部			
離繫果	二二五		
離言中道	二九六		
領受依處	二三六		
ロの部			
六位心所	一〇八		

大正四年七月廿日印刷  
 大正四年七月廿五日發行



不許複製

著者 花田凌雲

京都市油小路御前通上ル

發行者 清水精一郎

京都市北小路通新町西入

印刷者 須磨勘兵衛

京都市油小路御前通上ル

發行所

振替

大阪一〇八一五番  
東京四一一三番

興教書院

大洲鐵然師題辭勸學東陽圓月師述

●第一版

# 二卷鈔禾人錄

菊版總クローソス  
定價八拾錢  
郵稅八錢

本書の特色は善意解し易きは勿論、文々句々講述しつゝ、其要所に於て四十論題を設けて詳細に講述せられたるにあり。

### ■次日題論■

- 聖淨二教
- 頓漸二教
- 三經一異
- 難易分齊
- 聖道二教
- 三身證誠
- 內外因緣
- 法身通局
- 選擇本願
- 所化差別
- 特留新義
- 聖道方便
- 機教行信
- 對種法身
- 七種深信
- 證誠眞假
- 專念專修
- 厭欣前後
- 對種深信
- 白道二釋
- 遣喚分齊
- 回向三心
- 就人就行
- 正定業義
- 勅命義趣

勸學島地默雷師題字輔教米村永信師述

●第二版

# 宗要安心論題

菊版全一冊  
定價五拾錢  
郵稅八錢

島地和上は通して「肝腑骨目」といふ。眞に安心論題は一宗の肝腑なり骨目なり。本書は輔教米村永信師の新著にして従來の論題書とは大に其面目を異にし、各題に就て出處、釋名、義用、問答釋疑の四段に分ちて頗る丁寧に記載してたり。文章は平易にして明瞭なりよく宗學書流の難澁繁雜の弊を避け、義門は廣く諸説を擧げて一義一派に偏せず讀者をなして宗意安心の岐路に惑なからしむるを主とせられたり。

勸學 是山惠覺師講述

# 三帖和讚講義

菊判金三冊  
特價壹圓五拾錢  
郵稅拾貳錢

勸學 實成院仰誓師述

# 三帖和讚略解

四六版全三冊  
特價貳拾五錢  
郵稅六錢

佛敎大學 講 師 清原秀惠師述

# 諸經論大意

菊版全一冊  
定價五拾五錢  
郵稅六錢

勸學 赤松連城師題辭  
勸學 藺田宗惠師序文

六條學館主幹 富井隆信師序  
佛教大學講師 雲山龍珠師述

# 正信偈講義

菊版クローヌ綴  
上製金九拾五錢  
假綴美本  
並製七拾五錢  
郵税各八錢

附録

正信偈祖釋會本 ●附録のみ御注文は 定價七錢郵税貳錢

本書は雲山師が富井六條學會に於て時勢に應じ實地に講述せる事數十回又實に三經七祖の大綱に涉り正信偈の深意を明かに解説せしものなり

勸學 松島善海師述

# 正信偈講義

正價參拾五錢  
郵税四錢

輔教 斯波隨性師述

# 正信偈講義

正價參拾五錢  
郵税四錢

佛教大學長 藺田宗惠師述  
帝國大學講師

## 增補 再版 通俗佛教通觀

正價參拾五錢  
郵税六錢

河内佛敎講演會に於て佛敎通觀の題下に濳濟なる、佛敎通觀を條然として、誰人にも了解する様巧に其蘊奥を縷述せられたる、佛敎修養談に於て大に修道の好材料を與へらる、其も多年海外の實験に依て種々其も新なる譬喩例話を引證せられ、群集の精神界に一道の光明を與へらる

### 附佛教修養談 佛教道德觀

- 精神修養を論ず—宗教の必要を論ず—知識と信仰の調和
- 和實踐的信仰の活動—我々の手本となつて下さる教—信仰の状態
- 精神修養の最良方法—信仰の典型—宗教の選擇—實行
- 的宗教—宗教と道德—佛教と道德—人天教の道德觀—大小乗教の道德觀—淨土眞宗の道德觀

藺田宗惠師述

### 佛教道德觀

正價拾貳錢  
郵税貳錢

佛教大學考究院 西谷順誓師著

# 眞宗教義及大系

クローズ綴美本  
菊版四〇頁  
定價壹圓八拾錢  
小包料拾貳錢

## ▲内 容

- |   |          |    |           |    |             |
|---|----------|----|-----------|----|-------------|
| 一 | ◎前期教義史   | 七  | 蓮如上人の教義   | 六  | 宗學全盛期總論     |
| 二 | 親鸞聖人の教義  | 八  | 眞惠光教等の教義  | 七  | 學林隆盛時代の宗學   |
| 三 | 同 各論(上)  | 九  | 教義史結論     | 八  | 三業感論        |
| 四 | 同 各論(下)  | 一〇 | ◎後期宗學史    | 九  | 諸學派の分裂      |
| 五 | 直弟子時代の教義 | 一一 | 宗學興る      | 一〇 | 諸宗派の學說(班(上) |
| 六 | 孫弟子時代の教義 | 一二 | 興起時代の宗學   | 一一 | 諸宗派の學說(班(下) |
| 七 | 開闢時代の教義  | 一三 | 宗學の普及     | 一二 | 各派の宗學制度     |
|   |          | 一四 | 普及時代の宗學   | 一三 | 沈滯期の宗學      |
|   |          | 一五 | 惠空講師と法林能化 | 一四 | 宗學史結論       |

著者は固より教界無名の人なりと雖も、その專巧せる眞宗教學史實に至つては、正に世表に推獎すべきの士、世人動もすれば學問研究の事一に是れを先進大家に委し、又後進篤學の業を見る漸く輕からんとす、然るに學問の獨立と神聖とは却つて後進に依つて保持せられつゝあり、茲に著者慨然其椽大なる筆を揮つて縦前殆んど先進未到に屬せし一宗教學の跡を闡明す、其眞價に至つては讀者の鑑識に委して又絮說せじ。

佛教大學講師 雲山龍珠師述

# 六字釋講話

菊版全一冊  
金貳拾八錢  
郵稅六錢

六字名號は生佛の因果を總該したる妙法句なり、善導大師此の六字の深義を開闡し、念佛往生の意義に於て千古の鐵案を下し玉ふ、即ち玄義分の六字釋是なり。師又此の釋義の妙意を指摘せられたり。

故勸學 東陽圓月師述 ○再版

# 易行品略解

菊版全一冊  
金貳拾五錢  
郵稅四錢

難易二道の妙判を垂れ玉ふ、眞宗第一祖龍樹菩薩の、十住毘婆沙論易行品を講述せしもの也。今回再版に際し學界の便益を計り左の數題を附録とす

- ▲南天大士の略傳……………
- ▲華嚴の行者善財童子…脇谷擔謙師
- ▲華嚴經と易行品……………雲山龍珠師
- ▲淨土教として見たる華嚴經…湯次了榮師
- ▲本宗教相判釋論……………雲山龍珠師

勸學鈴木法琛師述

金 拾 錢  
郵 稅 貳 錢

他教眞  
力の隨

六條學會主幹  
富井隆信師序  
佛敎大學講師  
雲山龍珠師著

# 二河白道講話

金貳拾五錢  
郵稅金四錢

善導大師の二河白道の譬喩は、信前、入信、信後の光景過程を、

最も剴切周到に言ひ現はされてゐる。而して雲山先生の講

話は、最も精確に其深意を解釋されたのである。實に

二河を見た眼は、亦白道を見る、群賊惡獸の叫び  
を聞き耳は、亦た道喚の聲を聞く、惶怖に

冷へし心は、大悲の御光に暖めらる、

生死三毒の穢は法悦活動の市とな

つた、人生の起趣と云ふ大問

題は本書に書き盡され  
てゐる。

本書は大阪講習

會有志の希望により、

選擇集の咽喉たる三心四修

によりて、高祖聖人指導の下に

信心、念佛、稱名の區別聯鎖を講究せ

られしものなり、近來信仰界必讀の安心書な  
り。

324

458

終